

幼児の色彩選好と親のジェンダー意識

——ピンク色選好にみられるジェンダー・スキーマ——

清水 隆子

1. はじめに

私たちは多様な色彩にかこまれて普段の生活を送っている。服装にしても流行色があり、季節によっても変わってくる。色彩には明るい色、暗い色、暖かい色、涼しい色、軽い色、重い色、柔らかい色、固い色といったように多くのイメージがもたれている。このような多様な色彩の中で、人は色彩をどのように感じ、どのように評価・選好するのだろうか。

読売新聞社が3000人を対象にして1998年4月18・19日に行った全国世論調査では、16色（赤色・ピンク色・オレンジ色・黄色・黄緑色・緑色・水色・青色・紺色・紫色・茶色・白色・黒色・灰色・金色・銀色）を示して好きな色をいくつでもあげてもらっている。その結果を示すと、ベスト5は、白色、青色、緑色、紺色、水色であった。性別で見ると男性では青色

選好が際立って多く、全体的に寒色系が目立ったのに対し、女性では白色、緑色などの他に、ピンク色、赤色を選好した人も多かった（表1参照）。また、一人当たりのあげた色彩の数は、男性2.59色に対し、女性3.03色であり、女性の方が選好の幅が若干広いことがうかがえる。

1979年の読売新聞社による調査では、選好色8色であったが、白色（25%）、青色（21%）、緑色（14%）がベスト3で、基本的な色彩選好の傾向は変わっていない。千々岩（1988）は「日本人は青系統の色を好む傾向が従来からある。男女間で明確な差が出ているのは、男らしい色、女らしい色という、性と色を結びつける日本古来の文化が根強く残っているためとみられる」と分析している。

このような色彩選好の男女差はいつごろから顕在化し、その差異は、いかなる要因によってもたらされるのであろうか。

表1. 成人の色彩選好

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
女性	白色	緑色	水色	紺色	青色	ピンク	赤色	黒色	紫色	黄色
%	37.6	28.5	27.5	25.8	25.3	24.8	24.4	23.0	18.1	16.9
男性	青色	緑色	白色	紺色	水色	黒色	赤色	黄色	紫色	茶色
%	41.8	35.1	34.1	27.5	17.9	16.4	16.0	14.0	11.0	8.5

出所：読売新聞社（1998）

2. 問題と目的

1) 選好の発達

子どもたちが成長するにつれ、男子と女子では遊び友だちだけでなく、選好するおもちゃ、ゲーム、そして活動も異なる。おもちゃや活動の選好の流行は、ステレオタイプの流行と似通っており（Huston, 1983）、就学前の数年の間にジェンダー・タイプ化された選好が劇的に増加する。おもちゃの選好に関する差異は、2歳ごろからあらわれ、ジェンダー・タイプ化された選好は女兒よりも男児により多くみられるといわれている。そして仲間や親、メディアや社会化の影響のもとで5歳までに選好はしっかりと定着する（Carter & Levy, 1988; Coker, 1984; Martin & Little, 1990）とされている。

2) 幼児の色彩選好

ジェンダー・タイプ化された選好には、おもちゃやゲーム、活動の他に色彩の選好をあげることができる。例えば男の子は寒色系（青色・緑色など）を選好し、女の子は暖色系（赤色・ピンク色など）を選好するといった、いわゆる男の子色・女の子色もジェンダー・タイプ化された選好といえよう。幼児期の子どもたちは、親、保育園・幼稚園などの大人、友だち、メディアなど、幼児をとりまく様々な環境からの影響を日々受けている。その中でも、特に親は子どもの衣類や持ち物などの色彩決定に大きな影響を与えていると考えられる。

そこで、本稿では2つの調査研究から、幼児のジェンダー・タイプ化された色彩選好について、主に親との関わりを明らかにしたい。調査1では、幼児の色彩選好とその理由、親が子どもに対して実際に行っている色彩選択、色彩に

対するジェンダー意識についての実態調査を行った。調査2では、調査1で行った実態調査をふまえ、幼児の色彩選好と親の性役割態度との関わりを調査した。

さらに本稿では子どもが男らしさや女らしさと関連させて色彩を選好する現象について、ジェンダー・スキーマ理論を用いて考察をしていきたい。なぜなら、ジェンダー・タイプ化された色彩と男らしさ・女らしさを結びつける概念枠組みは、ジェンダー・スキーマ理論によって説明が可能であると筆者は考えているからである。

ジェンダー・スキーマ理論とは、Kohlberg（1966）によって提唱された認知発達理論から発展し、Bem（1981）によって提唱された理論である。この理論は、認知的アプローチであり、ジェンダー発達を説明するために用いられる主要な理論的パースペクティブの1つである。ジェンダー・スキーマの基本的な考え方は、ジェンダーに関連した情報のネットワークであるジェンダー・スキーマが人々の理解を色づけし、行動に影響を及ぼすというものである。つまり、ジェンダー・スキーマとは行動や特徴を「女性にふさわしい」あるいは「男性にふさわしい」とラベル付けするために必要な情報を提供するスキーマのことである。

3. 調査1：幼児の色彩選好と、色彩に対する親のジェンダー意識

男の子の衣類や日用品は、ブルーや茶色やグレイ系統のもの、女の子にはピンクや赤、オレンジ系統のものを使うなど、意識的、無意識的に性による色の区別がなされている。日本では子どものための商品は、必要以上に性による区

別をしている。そのため乳幼児期の子どもの周囲は、性による区別にあふれており、子どもたちは知らず知らずのうちに男らしさ、女らしさの固定観念を学習していくのである（牧野，1995）といわれている。色彩選好に性差があるとすれば、そのような差はどのような要因によって生じるのだろうか。

このような問題意識から、本調査では、幼児（3歳から6歳）の色彩選好とその理由を調査し、また子どもの身の回りの物や洋服などの色彩決定を行っていると考えられる親の色彩選択意識を調査することによって以下の3点を明らかにすることを目的としている。

1. 幼児の色彩選好に性差はあるのか。
2. 幼児の色彩選好にはジェンダーを意識した理由がみられるのか。
3. 幼児への色彩選択において、親はジェンダー意識をもっているのか。

1) 方法

(1) 調査対象

東京都（文京区、杉並区）、神奈川県（川崎市、横浜市）の幼稚園・保育園児310名（3歳児女児13名男児8名、4歳児女児54名男児46名、5歳児女児77名男児49名、6歳児女児40名男児23名）とその母親310名（26～30歳15名、31～35歳135名、36～40歳131名、41～45歳29名）。

(2) 調査期間

1998年9月～1998年12月

(3) 手続き

幼稚園・保育園を通じて質問紙を配布し、親が回答する項目と、親から幼児に質問する項目に記入してもらい、再度幼稚園・保育園を通し

て回収した。

(4) 質問紙調査の項目

①色名の決定

色名は読売新聞社が1998年4月に行った全国世論調査と、同年6月に行った本研究のための予備調査を検討し、14色（赤色・ピンク色・オレンジ色・黄色・黄緑色・緑色・水色・青色・紺色・紫色・茶色・白色・黒色・灰色）を決定した。本調査では、色名による質問紙項目を作成し、幼児の色彩選好の動向と親の色彩選択意識を明らかにする。

②子どもの色彩選好（複数選択）とその理由

幼児に14色（赤色・ピンク色・オレンジ色・黄色・黄緑色・緑色・水色・青色・紺色・紫色・茶色・白色・黒色・灰色）の中から好きな色とその選好理由の回答を求めた。

③親の幼児への色彩選択

14色の中から子どもの洋服や身の回りの物などを選ぶときに多い色について選択を求めた。

④幼児への色彩選択における、親のジェンダー意識度

子どもへの色彩選択の際、女の子らしさ・男の子らしさをどの程度意識しているかについて、「非常に意識する」から「全く意識しない」までの6件法で回答を求めた。

⑤親のジェンダー色彩の選択

14色（赤色・ピンク色・オレンジ色・黄色・黄緑色・緑色・水色・青色・紺色・紫色・茶色・白色・黒色・灰色）の中から、女の子らしい色・男の子らしい色の選択を求めた（複数選択）。

2) 結果

(1) 幼児の色彩選好の性差

幼児の色彩選好の性差について χ^2 検定を行った。その結果、有意差のあった色彩のうち、女子の色彩選好比率が高かった色彩は、ピンク色 [$\chi^2(1) = 117.314, p < .01$] 黄色 [$\chi^2(1) = 8.75, p < .01$] オレンジ色 [$\chi^2(1) = 8.343, p < .01$] 赤色 [$\chi^2(1) = 7.711, p < .01$] 白色 [$\chi^2(1) = 7.526, p < .01$] 水色 [$\chi^2(1) = 3.945, p < .05$] であり男子の色彩選好の比率が高かった色彩は青色 [$\chi^2(1) = 15.198, p < .01$] 黒色 [$\chi^2(1) = 11.913, p < .01$] 緑色 [$\chi^2(1) = 9.339, p < .01$] 紺色 [$\chi^2(1) = 5.977, p < .05$] 灰色 [$\chi^2(1) = 3.266, .05 < p < .10$] であった。

この結果から女子は暖色系を好み、男子は寒色系を好むといった傾向は、幼児の段階からすでに顕在化していることが明らかになり、中でも特に女兒が選好するピンク色に顕著な性差がみられた。また男女ともに選好されている緑色系 (黄緑色・緑色) や青色系 (水色・青色) で

は、女子が黄緑色と水色、男子が緑色と青色を選好しており、女子の方が淡い色彩 (パステルカラー) を選好している (グラフ参照) ことも明らかになった。

(2) 幼児の色彩選好の理由づけ

KJ法を用い、幼児の色彩選好理由を「ジェンダー的理由」「説明的理由」「形容的理由」「エピソード的理由」「その他」の5つに分類した。

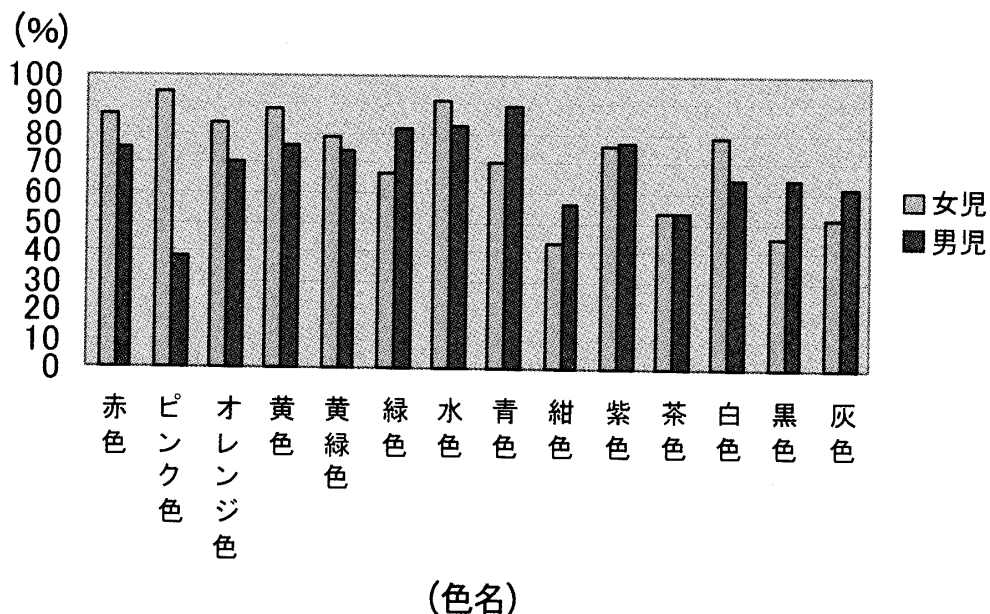
ジェンダー的理由: 女らしさ・男らしさを色彩選好の理由としたもの。

説明的理由: 色彩の説明を理由としたもの。例えば、「赤はりんごの色だから好き」といった理由づけ。

形容的理由: 色彩の形容を理由としたもの。例えば、「白はきれいだから好き」といった理由づけ。

エピソード的理由: 色彩にまつわる出来事を理由としたもの。例えば「お絵かきするときによく使う色だから」といった理由づけ。

その他: 以上の分類にあてはまらない理由づけ。



グラフ 幼児の色彩選好の性差

表2. 女兒のピンク色選好理由

	3歳女兒	4歳女兒	5歳女兒	6歳女兒
ジェンダー的理由	女の子っぽいから (1)	女の子らしいから (5)	女の子らしいから (5)	女の子らしいから (6)
説明的理由		桃の色だから(3) バラの色だから(1) ポケモンの色だから (1) デビルマンの色だから (1) ハートの色だから (1)	桃の色だから(3) お花の色だから(2) お姫様の色だから (2) バラの色に似てるから (2) 桜の花の色だから (1) 夕焼け色だから(1) チューリップの色だ から(1) 口紅の色だから(1) ケーキのクリームの 色だから(1) パステルカラーだか ら(1)	ハートの色だから (3) リボンの色だから (3) うさぎの色だから (1) ピーチあめの色だか ら(1) 花の色だから(1) 幼稚園のクラスの色 だから(1)
形容的理由	かわいいから(4) きれいだから(3) すてきだから(2)	かわいいから(21) きれいだから(15) やさしいから(2) 赤と合うから(1) 水色と合うから(1) 明るいから(1) いい色だから(1) 素敵だから(1) 幸せだから(1)	かわいいから(24) きれいだから(20) 水色と合うから(4) 明るいから(3) やさしいかんじだか ら(3) 素敵だから(2) リボンに合うから (2) おいしそうだから (1) うすいから(1) いい色だから(1) 幸せな色だから(1) いいことが起きそう だから(1) ふわりとしてるから (1)	かわいいから(8) きれいだから(7) うすいから(3) 明るいから(1) ふわっとしてるから (1) ぼかぼかしてるから (1)
エピソード的理由	ズボンを持っている (1)		お母様が好きだから (1) お化粧するときに、 かわいい色だから (1) 妹が好きだから(1) 桃組だったことがあ る(1)	
その他	好きだから(1)	好きだから(3)	好きだから(5)	好きだから(2)

注) カッコ内の数値は回答数を示す。

幼児の色彩選好理由をみると、ジェンダーを意識した選好理由は、特にピンク色にみられた（表2参照）。ピンク色の選好理由は「女の子らしさ」を理由としたものが、女兒に顕著にみられた。説明的理由では、女兒はテレビ番組・アニメ映画・童話の登場人物の色を理由とする傾向がみられ、男児は、テレビ番組（レンジャーものの番組）の色だけでなく、電車の色を理由とする傾向もみられた。また、色彩評価による形容的理由（「きれいだから」「さわやかだから」）は女子に多く見られ、色彩連想による説明的理由（赤色の場合「りんごの色だから」「炎の色だから」）は男子に多く見られた。

（3）子どもへの色彩選択

①子どもの性別による親の色彩選択

子どもへの色彩選択の性差について χ^2 検定を行った。その結果、有意差のあった色彩の中で女兒への色彩選択の比率が高かった色彩は、ピンク色 [$\chi^2(1) = 107.951, p < .01$] 赤色 [$\chi^2(1) = 19.051, p < .01$] 水色 [$\chi^2(1) = 6.533, p < .01$] の3色であり、男児への色彩選択の比率が高かった色彩は、青色 [$\chi^2(1) = 26.575, p < .01$] 緑色 [$\chi^2(1) = 20.253, p < .01$] 灰色 [$\chi^2(1) = 18.726, p < .01$] 紺色 [$\chi^2(1) = 9.01, p < .01$] 黒色 [$\chi^2(1) = 5.425, p < 0.5$] の5色であった。女の子には暖色系を選択し、男の子には寒色系を選択するといった傾向がよく現れているといえよう。

②幼児への色彩選択における、親のジェンダー意識度

子どもへ色彩選択をする際のジェンダー意識度は、全体で「非常に意識する」が3%、「かなり意識する」が17%、「少し意識する」が52%、「あまり意識しない」が17%、「ほとん

ど意識しない」が7%、「全く意識しない」が4%であった。これを大きく二分すると、「意識する」が72%、「意識しない」が28%であり、多少なりとも意識する比率が高いことが明らかになった。

③親のジェンダー・タイプ化された色彩の選択（女の子らしい色・男の子らしい色の選択）

女の子らしい色ではピンク色・赤色・オレンジ色が上位を占め、男の子らしい色では青色・緑色が上位を占めた。子どもへの色彩選択と同様に、暖色系を女の子の色、寒色系を男の子の色として選んでいる傾向が見られた。

3) 考察

子どもの色彩選好は、幼児の段階から性差が見られ、色に対して「男の子色」「女の子色」といった概念をもっていることが分かった。色彩とジェンダーを結びつける概念は、特にピンク色にみられ、「女の子らしさ」とピンク色を結びつけて選好する傾向が女兒にみられた。

そして親の色彩選択意識は、ジェンダーを非常に意識したものであることが明らかにされ、女兒の色彩選好と同様にピンク色と「女の子らしさ」を結びつける傾向が顕著にみられた。子どもの色彩選好の背景や理由については、幼児にとって一番身近と思われる親からの影響があるのではないかと考えられるが、幼児の色彩選好理由の中にはテレビ番組やアニメ映画のキャラクターの色をあげたものも多く、メディアからの影響も大きいことが伺える。

4. 調査2：幼児の色彩選好と親の性別役割態度

調査1では、幼児の色彩選好とその理由、そして親の幼児への色彩選択やジェンダー・タイ

プ化された色彩の選択、子どもに対する色彩選択の際のジェンダー意識についての実態調査を行った。ジェンダーを意識した色彩選択は親にみられるだけでなく、幼児の色彩選好理由にもみられた。そして幼児の色彩選好の性差はピンク色に顕著にみられ、ピンク色と「女の子らしさ」を結びつける傾向が明らかにされた。

このような実態調査を踏まえ、調査2では親のジェンダー意識と幼児への色彩選択について、親の性役割態度との関わりを明らかにしていきたい。たとえば、親の性役割態度が伝統的であるほど、男の子には青色などの寒色系を選択し、女の子にはピンク色などの暖色系を選択すると考えられる。このようにジェンダー・タイプ化された色彩選択には、親の性役割態度が影響しているのではないだろうか。調査2では、幼児とその親を対象に以下の2つの仮説を検証することを目的としている。

1. 親の性役割態度は、子どもへのジェンダー・タイプ化された色彩選択に影響を及ぼす。
2. 親の子どもへの色彩選択は子どもの色彩選好に影響を及ぼす。

1) 方法

(1) 調査対象

東京都（葛飾区、渋谷区、新宿区、府中市、国立市、小平市、昭島市）、神奈川県（小田原市）の保育園園児185名（3歳児31名、4歳児58名、5歳児52名、6歳児44名）とその親188名（母親177名、父親11名）。親の年齢は、21～25歳2名、26～30歳33名、31～35歳64名、36～40歳60名、41～45歳24名、46～50歳5名）。

(2) 調査期間

2000年10月～2000年12月

(3) 手続き

幼稚園・保育園を通じて質問紙を配布し、親が回答する項目と、親から幼児に質問する項目に記入してもらい、再度幼稚園・保育園を通して回収した。

(4) 質問紙調査の項目

①色票の決定

調査1では14色の色名を用いたが、青色と紺色の区別がつかない幼児がみられたため、紺色を除いた13色を用いることとした。また、色彩選好のより正確な調査を行うために、色名だけでなく色票を用いて調査を行うこととした。13色の色票を用い、親に対しては子どもへの色彩選択、男の子らしい色・女の子らしい色の選択を調査し、子どもに対しては、子ども自身の色彩選好を調査した。用いた色票（財団法人日本色彩研究所配色カード129b使用）の色番号は以下に示す。

赤色 (v2) ピンク色 (lt2) オレンジ色 (v5) 黄色 (v8) 黄緑色 (v10) 緑色 (v12) 水色 (lt16) 青色 (v17) 紫色 (v21) 茶色 (dk4) 白色 (w9.5) 灰色 (mGy4.5) 黒色 (Bk1.0)

②親の性役割態度

鈴木（1994）の平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）を用い、親の性役割態度（平等志向性・伝統志向性）を測定した。

2) 結果

(1) 親の性役割態度と子どもへの色彩選択

親の性役割態度が伝統志向であるほど、子どもへの色彩選択に影響を与え、男の子には寒色系、女の子には暖色系を選択するという研究仮説であったが、結果は親の性役割態度に関わら

ず、子どもの性別によって色彩選択が決まることが明らかになった。またこの結果は調査1と同様にピンク色のみにもみられた。つまり、親の性役割態度が伝統志向であっても、また平等志向であっても、子どもが女の子であればピンク色を選択し、男の子であればピンク色を避けるという傾向がみられた。

（2）親の色彩選択と子どもの色彩選好

親の色彩選択と子どもの色彩選好の関わりについて、 χ^2 検定を行った結果、13色中ピンク色に有意な結果が得られた。ピンク色に対する女兒の選好と親の女兒への選択についての分割表をみると、ピンク色を選好した女兒68名のうち、「親の選択あり」が54名、「選択なし」が14名であった。また、ピンク色を選好しなかった女兒15名のうち、「親の選択あり」が7名、「選択なし」が8名であった。女兒のピンク色選好と親の女兒へのピンク色選択の独立性について、 $\alpha = 0.01$ で検定を行った。得られた χ^2 値6.765は自由度1の1%水準6.64を超えているため有意であるといえる。さらに、ピンク色に対する男児の選好と親の男児への選択についての分割表をみると、ピンク色を選好した男児36名のうち、「親の選択あり」が17名、「選択なし」が19名であった。また、ピンク色を選好しなかった男児47名のうち、「親の選択あり」が12名、「選択なし」が35名であった。男児のピンク色選好と親の男児へのピンク色選択の独立性について $\alpha = 0.05$ で検定を行った。得られた χ^2 値4.217は自由度1の5%水準3.84を超えているため有意であるといえる。

ピンク色は女兒の親に選択され、女兒自身の選好比率も高く、また男児の親に避けられ、男児自身の選好比率も低いという結果が得られた。

3) 考察

子どもに対する親の色彩選択は、親の性役割態度に関わらず、子どもの性別によって決まることが明らかにされた。その中でもピンク色には、親のみならず幼児の段階から既に「女の子らしい色」という概念がもたれ、女兒に選好され女兒の親にも選択される結果となった。調査1で得られた結果と同様にピンク色と「女の子らしさ」を結びつける傾向が親にも幼児にもみられた。このようにピンク色にみられるジェンダー・タイプ化された選好の概念枠組みには、幼児と親に関連がみられることが明らかになったといえよう。

5. ジェンダー・スキーマ理論を用いた総合的考察—ピンク色にみられるジェンダー・スキーマ—

調査1と調査2で行った幼児の色彩選好と親の色彩選択には、特にピンク色に顕著な性差がみられた。親だけでなく、幼児の段階からすでに、ピンク色には「女の子らしい」イメージがもたれており、親は女兒へピンク色を選択し、女兒も選好していた。一方、ピンク色は男児の親には避けられ、男児の選好比率も低いことが明らかになった。「女の子らしさ」をピンク色と結びつけることは、ジェンダーに関連した色彩の情報によって、実際の色彩選好行動に影響が及ぼされていると考えられる。このように、ピンク色と女の子らしさを結びつけることは親だけでなく、幼児期にも根強く認知されるスキーマであるといえよう。

6. 今後の課題

本研究では、ジェンダーに関連した選好発達

について、特に幼児の色彩選好をとりあげた。その結果、ピンク色に関しては幼児の色彩選好と親の色彩選択とが適合的に連関していることが明らかになった。今後はなぜピンク色が「女の子らしさ」と結びつけられるのかについて、日本における色彩文化や色彩選好の歴史を含めた幅広い視点から、その理由を明らかにしていきたい。また、親との分離がはじまる児童期・青年期における色彩選好の変化を明らかにするとともに、児童期・青年期における科目やコース選好においてジェンダー・スキーマ理論がどこまで適用できるかについても検討を試みたいと考えている。

参考文献

- Bem, S. L. (1981). Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*, 88, 354-364.
- Carter, D. B., & Levy, G. D. (1988). Cognitive aspects of children's early sex-role development: The influence of gender schemas on preschoolers memories and preferences for sex-typed toys and activities. *Child Development*, 59, 782-793.
- 千々岩英彰 1988 「色型人間」の研究 福村出版
- Coker, D. R. (1984). The relationships among gender concepts and cognitive maturity in preschool children. *Sex Roles*, 10, 19-31.
- Huston, A. C. (1983). Sex-typing. In E. M. Hetherington (Ed.). *Handbook of child psychology: Socialization, personality, and Social development* (Vol. 4, pp. 388-467). New York: Wiley.
- Kohlberg, L. A. (1966). A cognitive-developmental analysis of children's sex role concepts and attitudes. In E.E.
- Maccoby (Ed.). *The development of sex differences* (pp. 82-173). Stanford, CA: Stanford University Press.
- 牧野カツコ (1995) 教育における性差別 柏木恵子・高橋恵子 (編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 p. 248
- Martin, C. L., & Little, J. K. (1990). The relation of gender understanding to children's sex-typed preferences and gender stereotypes. *Child Development*, 61, 1427-1439.
- 清水隆子 (2003) 選好をめぐるジェンダー発達心理学的研究の成果と課題. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 第10号-2
- 鈴木淳子 (1994) 平等主義的性役割, スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. *心理学研究*, 34-41.